

丈人力のススメ ～未踏の「人生九〇年」を踏破する～

筆名 堀 亜起良 東洋哲学者

元『知恵蔵』編集長 堀内正範 著

目次

その一 「引退余生」でいいか 「現役長生」がいいか

- 一 「人生六五年」から「人生九〇年」へ 3
- 二 「丈人力」を活かす成熟・円熟期 11
- 三 長寿を愛しむ三つの流儀 19

その二 「マイホームパパとママ」の憂鬱

- 一 「しあわせ家族」は外にある 31
- 二 マドギワに居場所をすえる 39
- 三 宙に浮いたままの「暮らしの知恵」 47

その三 生活感性を満たす国産・地産品

- 一 「MADE IN JAPAN」はどこへ行った 56
- 二 途上国産の日用品に囲まれて 67
- 三 アベノミクス+エイジノミクス 75

その四 「地域の四季」を探し求めて和風回帰

- 一 和風回帰のキイは「季節感」の共有 88
 - 二 春秋のまわり舞台で衣食住を演出 99
 - 三 中心街は「三代四季の情報源」 117
- その五 高齢期二五年の居場所づくり
- 一 「エイジング・イン・プレイス」での日々 127
 - 二 高齢社会活動の先行的事例 139
 - 三 「新・地域ブランド品」で全国制覇へ 150
 - 四 わがまちの「生活支援コーディネーター」 158
 - 五 仲間+たまり場+まちづくり 166
- その六 「人生の達人」としての八面玲瓏
- 一 まあ、いいか、でいいのか 175
 - 二 ひとりの住民・市民として 188
 - 三 ひとりの国民として 197
 - 四 ちよつとばかり国際人 208
 - 五 不戦不争の灯かりを伝えて 218
- おわりに
- そして「寿終正寝」(天寿)を全うする 220

その二 「マイホームパパとママ」の憂鬱

一 「しあわせ家族」は外にある

イエローカード一枚ずつの娘と息子

*アノヒトとかヒカラビてる人といわれて

マイホーム。

なんともいえず響きのいいことばである。

これほどまでにやわらかい生活感を内包しえたカタカナ語を、他に探すのはむずかしい。耳にすると心安まる。

マイホーム。

それはいま高齢者となっている人びとが、それぞれの人生をかけて、二〇世紀後半の五〇年間にその内容をつくった日本語なのである。

だから細部の意味合いは個人によって異なる。

よき（良き、好き、善き）もの、ひよわなもの、やわらかいものを守る城として、「マイホーム」は先行の「わが家」や「家庭」などとともに、それに負けない温もりを日本語として持つ

に至っている。

そのぶん「ホームレス」ということばがわびしさを伝えてきた。

戦後っ子だったパパとママは、先輩に「マイホーム主義」とからかわれながらも、狭い団地の2DKに身を寄せ合って暮らして、ふたりの子どもを育ててきたのだった。夫婦と子どもふたりの家族が都市型住民の典型となり、「核家族」と呼ばれ、「標準家庭」ともなった。

その後、職場までは遠くなっても、マイホーム・パパとママは、二段ベッドで育った子どもたちそれぞれに一部屋をと考えて、というより子どもにせがまれて、団地からさらに郊外のプレハブ一戸建ての3LDKに引っ越した。そういう体験をもつ人びとは少なくないだろう。

人生模様はさまざまあっても、それが目標の「しあわせ家族」だったのである。そういうしあわせを保っているご家庭はここでは静かに見守ることにしよう。

いま、たしかに家はある。が、わが家に「しあわせ家族」はない、とFさんはいう。
？ Fさんのいい分を聞かないわけにいかない。

Fさんもまた、「しあわせ家族」をめざしたひとり。そしてその成功者と見えたのに、なぜ。人生のはるか遠い地点までを見透かして、可能なかぎりの費用を工面してマイホームを獲得して、いまそのころ見据えていた地点の近くに高齢者として立っている。定年後まであった住宅ローンはなんとか退職金で完済した。長かった来し方を顧みていま、Fさんはマイホームの当主として存在感の薄かったことを感じている。

みずからの希望を抑えて、家族の希望をかなえることを優先してきた。

そこで不相応な応接セットや家具といった家族の共用品はあっても、みずから求めた専用品というのは少なく、「モノと場」に表わされる当主としての存在感が希薄なのである。

子どもたちが自立せず、「エンプティ・ネスト」（空の巣）とはならず、夫婦と子どもふたりの核家族の形をなお保っている。娘と息子がふたりとも「パラサイト・シングル」（寄生独身者）をきめこんで、親元から出て行かない家庭。そのことで、サツカーならイエローカード一枚ずつといった子どもと暮らしているFさんは、「しあわせ家族」ではないという。

とって後で触れるが「エンプティ・ネスト」家族がしあわせの証とはいえないだろう。

Fさんは戦争が終わった翌年の昭和二十一年生まれだから出生数が少ない「プレ団塊」である。しかしからだが弱かったこと、親の移動の事情が重なったりで、中学校を三年遅れで昭和二十四年の団塊組といっしょに卒業した。どちらかといえば戦中生まれの人たちに親しみを感じるといふ。そして奥方は団塊を挟んだ昭和二五年生まれ。だからF夫妻は意識の上では団塊であり団塊でない。

イエローカード一枚の娘は、「子団塊」のあおりを受けて、短大を出てからずっとフリーター暮らし。かせぎはほとんど衣装と旅行に消えている気配。下の息子は浪人はしたが、ごく普通の大学をごく普通に卒業して、就職試験を受けて勤めはじめたふつうより名の知れた輸送会社だったのに、短期でやめてしまって家にいる。

親のひいき目でもしっかりしてきたように見えるのだが、自主性にまかせているのだが、というより言っても聞かないから気ままにさせているが、同じ経緯をもつ友だちとパソコンやケイタイで情報のやりとりをすすがしている。「ニート化」(NEET)。就業希望を有しない若年無業者)への気配もただようが、時折り出かけて「職さがし」はしている。

Fさんが毎日家に居るようになって、娘や息子の話を聞くともなく聞いていると、両親と同じ高齢者のことを「ヒカラビてる人」とか「ヨボヨボジジババ」といつていることがある。時には父親に対して「アノヒト」、母親には面とむかって「キミ、元気かね？」などと軽くあしらわれていると感ずることがある。

父親の存在はそれほど意識せずに気ままにすごしている。

「この家はわたしが名義人なのだ」というのも愚かしい。

壁面に娘が貼ったままの「のりか」(藤原紀香)のポスターほどには、底値までさがった土地の築二〇年余という家の壁に存在感があるわけではない。

「ヒップガシ娘」 vs 「ツカエナイ親」

*総理までが女性と若者に味方する

「塩づけにできる資産などどこにもありはしないし、いまでさえわが家では子どもたち、とく

に娘によって強奪に近い形でヒッペガシ（資産移譲）が行われている」

とFさん。

高齢者の「平均貯蓄額」が二三七〇万円とか、暮らし向きに心配のない人が七割を超えると
か。そんな調査を同居の娘と息子をもつFさんは「聞かせたくない」という。そして「信じら
れない」と付け加える。数字にいつわりはないとはいえ、将来が不安で貯蓄をしたというの
から、将来展望をもって貯蓄など考えずに生きてきた自分や先輩とは違うと感じている。

「ほどほどの赤字人生が男子の美学だよ」

と、会社の先輩たちは貯蓄など考えずにきっぱりいい、

「きちんと仕事をすれば、どこで何をしていても、ほどほどの赤字暮らしをするものだ」

と割り切って飄々としていた。Fさんも後輩として、赤字まではともかく、ゼロに始まって
ゼロに戻る人生を納得する男子の覚悟ぐらいはしてきた。このあたりの考え方は「純正団塊」
とは違う。だから娘や息子には申し訳ないが、貯蓄とはいえない貯蓄しかない。

しごとはやってきたし、まだやるつもりだし、やらねばならない。しごととはほどほど、家に
FAXを置かず、確定申告で税金逃がれをし、貯蓄にいそんでいたMの顔が浮かぶ。

「あいつが人生の勝利者か」

高齢者のしごとを探すと少ない。ここにも一〇年余の対策の延滞が露呈している。

一方、女性の登用は「ダイバーシティ」（多様性）と呼ばれて多様に用意されている。女性が

これからの国の経済、社会の担い手になるのはいいのだが、どれほどの若い女性が自分の実力（かせぎ）で暮らしているのだろうか、ローライズ・パンツ（体型ギリギリのヘソ出し衣装）からいそいそとデイオールのパーティー・ドレスに着替えて、自在に「変衣変性」する娘の姿をみながら、Fさんは際限なしの「女性化」に懸念をもっているのである。親の育て方がどうのこうのではなく、風潮なのだからとやかくいっても仕方がないが。

娘たちを「時代の花」として擁護し、女性の活気に期待する立場からは、無条件に、両親や祖父母の「六つの財布」からうまくせしめるのも実力のうちとする意見もあり、何より娘たちは必要に応じての家庭内ヒツペガシは当然のことと考えている。孫への教育費一五〇〇万円無税譲渡を見逃さない。それなら目前に必要な社会教育費として、娘たちの費用にまわすべきだという論法である。耐えられるご家庭はいいが。

ダボス会議の「男女格差報告」では、これまでも一〇〇位以下という外国にくらべた女性活用の低位置が話題になってきた。それが急に経団連や同友会までが、女性の登用を「ダイバーシティの推進」としてすすめる。「団塊の世代」の総退場による職場の弱体化を埋めるにはこれしか方法がないかのように。女性の活躍で経済活性化をという「行動計画く働く』なでしこ』大作戦く」が、二〇一二年六月に野田内閣の関係閣僚会議で決定された。

そして安倍総理もことあれば女性と若者の成長力に期待し、国連総会の演説でも女性重視を打ち出している。

女に生まれてよかった。笑顔で「お・も・て・な・し」といえば、なんでも可という世相なのである。テレビ画面は、すでにはしゃぎまわる女性たちで占められている。

人並みに応じられないと、「ツカエナイ親！」としてあしらわれる。

お前こそ「ヒツペガシ娘！」といい返せないところがつらい。Fさんばかりか、うかうかしている心優しい高齢者から居場所もない、おカネもなくなりかねないのである。

新世紀になって、若い女性やIT青年たちとともに渋く輝いている存在になるはずだった高齢者が、居場所もおカネもなくなるとは何たる仕打ち！

職場ではIT音痴と軽視され、売れ筋ヤング製品の現場からはずされ、はてはリストラの対象となる。「ハローワーク」（公共職業安定所）の窓口の混雑ぶりや、上野公園や新宿などで見られた「ホームレス」用の青テントの群れや炊き出しに集まっていた人びとを思うたびに、Fさんには、戦後すぐごろの「ふりだし」へと戻って行くように思えてくる。

安心の老後どころではない。いったいだれが振った賽の目が悪かったのか。

「家庭内ホームレス」の予感

*居場所は図書館・ファミレス・パチンコ屋

何としたことか、わが家にいて、「ホームレス」とさほど遠くないわびしさを感じている戦後

ツ子パパが増えているという。「下流老人」ということばも先回りして動いている。

パパがすすのにふさわしいステージが家庭内からなくなりつつある。というよりこれまでもなかったのに気づかなかつただけのことである。

テレビのチャンネル権はもともたない。というより見るに値する番組がない。ラジオは深夜にふとスイッチをいれて、ほっとするいい人の話や音楽とめぐりあうことがあるが。

クルマは一台しかないから行く先が違えば使えない。というより子どもたちのようにあちこち行く場所がない。しかし車検・整備・ガソリン・JAF費用まですべて親持ちである。

食事は洋風が多くなった。うどんよりスパゲッティ。自分では急に作りようがないから外食時代に好きだったものも食べられない。これがつらい。

つまり「対策大綱」の指針であるはずの「居場所」も「出番」もない状態が深まっていく。

聞けばだれもが同様で、会社でのしごとがなくなって、家に居場所がなくなって、「ホームレス」気分になる。といって屋外で長時間をすごせる居場所は限られていて、二四時間営業のファミレスか、公共図書館か、パチンコ屋の休憩室くらい。

「ステージ」がない原因は自分たちにもあるが、社会のしくみがあると憤ってみても、どうしたらいいのか解らない。だからウォーキングでいらいらを解消するしかない。

このまま推移しては、高齢者のだれもが不安なく暮らせる「高齢社会」へ、少なくともそこへ向かっていると感じられる暮らしは招き寄せようもない。

ニ マドギワに居場所をすえる

「MY・・・」がなくなるマイホーム

*CMまでがことば巧みにそそのかす

Fさんは改めてじっくりわが家の中を見直して見る。

本だなの本が動いていない。家具はどれも一〇年以上まえに購入したものばかり。二〇世紀の骨とう品だ。

一方、暮らしの表面を流れていく日用品は百均（DAISO）やスーパーものが多くなった。シヤツはユニクロ（UNIQLO）かアジア途上国製品である。妻や娘の持ち物にはブランド品もあって、ルイ・ヴィトン（LOUIS VUITTON バッグ）やプラダ（PRADA バッグ）やディオール（Dior 服装品）やシャネル（CHANEL 化粧品）などはFさんにもわかる。しかしスーパー品とのアンバランスに父親であり夫である自分への無言の不満が隠されているように思える。

Fさんのブランド品といえるものは、後にも先にもオメガ（OMEGA 終わりの意）の腕時計だけ。家族を優先してきたことでの専用品の希薄さは、みずからのために生きることへの自負の欠落ではないかと思う。

家庭内に自立した存在としての拠点がない。

「マイホーム」のために努めてきたはずなのに、と思うのはFさんのほうの都合であって、最も優遇されている仲間を比較の基準とするジュニア側は、そうは思っていないのである。

「ツカエナイ親！」として、おおかたは現状に不満なのである。

両親に対する不満と葛藤を行動のエネルギーにしている子どもたちの体内に蓄積された「荒廃菌」のありようを、つまりわが子の「潜在的ワル度」をFさんはつかめていない。

現役時代に、自分が家庭内に持ち込んでいたタブロイド版夕刊紙の「悪を暴く記事」やイエローやピンク記事から増殖した「荒廃菌」が、抗体のなかった子どもたちに取り込まれて、いまや胸の中をうようよ泳いでいるのだ。家内に何度注意されたかしのれない悪酔いと夕刊紙持ちこみには後悔している。子どもが発することばに他者への悪意が混じるからだ。

もうひとつ、このごろはテレビのCMの中にあやしいものがある、と思う。

CMは、だからとも疑われることなく家庭内に侵入する。家庭内にたやすく入れられるのは時代の進歩を担う善人としてだ。ところが家庭内にはいると美德ではなく損得を説く。差別感を助長し、勝者と敗者をつくる。新製品を買えない家庭の子どもたちは、外にある「しあわせ家族」を想像し、「ツカエナイ親！」として両親のふがいなさを責める。その都度、子どもたちは体内の荒廃菌にそのかさされ、相手を抹殺して勝利する独善的な魂を育てているのではないか。

どうやらCMの中には、ことば巧みにしかけた善意で、「福は外、鬼は内」と呼びかけて、子

どもをそそのかして家庭内を翻弄する。

Fさんは家庭内に自分を支える磁場がないことに危機感を覚える。

マイホームに「MY・・」がない。

家庭内で自立するためには、存在感をきちっと示すような拠点が必要なのだ。そのための専用スペースとモノの確保。

といって、夫婦と子ども二人の最低居住水準をぎりぎりクリアしている「3LDK」の住まいだから、当主として一部屋なんていう余裕はない。子どもたちが親ばなれをせずにいるから、それぞれに一部屋、それに夫婦の一部屋である。

部屋の確保を謀って追い出し（子どもの自立）を試みても、失敗した末に孤立してしまうようでは、拠点づくりどころか「家庭内ホームレス」の確認になってしまう。

若者の引きこもりの多いのは聞いているが、二人ともこんなことになっているのは、わが家だけなのだろうか。Fさんは憂鬱である。

「家庭内高齢化リストラ」は、妻にも黙って自らするものである。たとえ不在であっても、当主の存在感を示せるような「不在の在」としての「わたしのもの、MY・・」の形成。

となると共用スペースであるリビング・ルームの一面に、たとえ不在であっても当主の存在感をきちっと示せるようなコア（核）をつくることにある。

高齢者みんなにそういう意識がないからモノもないのではないか。このFさんのモノ意識は

次章に述べるが重要である。

いまリビング・ルームを見渡しても、おおかたは共用品なのだ。傍らにあって、わが生活感
性になじんで高齢期人生を輝かせてくれる「高齢化用品」を身のまわりに配置すること。

これまでに蓄えてきた知識や積んできた経験や技能をさらに深化・発展させることに資する
「わたしのモノ」を、いつでも利用できる状態にして置いておく。知識や経験や技能は、自分
の将来と地域社会への参加にかかわるだいたいな「個人資産」になるとFさんは気づいている。
身近にあって「わたしのモノ」という役割を担えればいいのだから、ブランド品である必要
はない。日ごろから愛用しており、それなりの手触り感があればいい。

これと決めた「わたしのモノ」を基点にして「家庭内リストラ」をすすめる。長い高齢期の
住環境を少しずつ、さりげなく整えようというのである。

「MY・チェア」をマドギワにすえる

*即座の効用は不在時の存在感

しごとを離れて毎日家にいるようになったFさんは、転機を感じている。リビング・ルーム
を見直して、ネコの額ほどの庭と室内の双方が見渡せるマドギワに、高齢者特別席「シニア・
スペシャル・シート」を据えることにした。会社でもマドギワだったし家でもマドギワがいい

と、居心地を合わせることにして。

そして文字盤が気にいっている置き時計をサイドボードの隅に、旅先で記念に入手したパピルスに画いた「狩猟図」を壁面に飾ることにした。

Fさんの「SS（シニア・スペシャル）シート」は、高齢期人生を表現する「コア（核）用品」として、含みのあるいい選択のようである。重量感より意匠センスより何よりも座り心地を優先する。いくなればわが家の「玉座」「師子座」「座禅座」である。

かつてインドでシャカムニが宝樹の下に座して思惟したように、わが人生の来し方と行く末を半跏思惟する座なのだから、「MY・チェア」として大切に扱うことにしたい。すでに愛用のイスをお持ちのみなさんは「MY・チェア」と呼んでください。座して高齢期人生の今日から明日へを静かに思惟する「半跏思惟丈人」となる。

「人間は誰しも『私の椅子』と呼べるような椅子を持つ必要がある、そうやって初めて自宅で本当に落ち着いた気分を味わえるのではないか」

というのは、マイホームを建てたころの建築家の提言で、まことにその通りと思っただけで、家族思いの当主としてはそこまでの自己主張をしなかった。

老い先長い高齢期を通じて使い込むことよって座り心地を熟成させてゆく「MY・チェア」。

Fさんのデパートめぐりの調べによれば、さすがに「座る文化」の歴史が長い欧米の製品はさまざまに意匠をこらして、見るからによく、座り心地もよさそうだという。

最高の座り心地を誇るのは頭と腰がほどよくフィットする北欧製のリクライニング・チェア。競うのはドイツ製スツール、イタリア製アームソファ、カナダ製スウィング・チェアなど。いずれ劣らぬ居ずまいがあるし、値段も思いのほか幅があるようだ。

長い高齢期を安らいですぐすための拠点が「MY・チェア」なのだから、これといったイストと出会ったら思い切って投資（浪費）をする。還暦の祝いもいいし、古希でも遅くはない。

一日の活動を終えて、「やれやれ」と腰を落とし、心を静めてひとときり一日をふりかえる。「さて」と気を改めて明日を思い、「よし」と意を決して立ち上がる。

それでいい。それが「MY・チェア」の即座の効用なのだ。

どっしり座って、からだの重みとともに来し方への充足感と行く末への待望感を委ねる。時には座して陶然として、すべてを忘れる「坐忘」の境地にもひたれる。

それなくして何の人生か。

わたしのモノ同士のモノ語り

* 専用品への要請が内需の契機に

静かに「家庭内高齢化リストラ」をすすめる。百均商品でがまんしてきた日用品も、自分の生活感性にあった国（地）産品に差し替える。なければ専門店や企業現場に問い合わせても、

やや高でも、「高齢化コア用品」として入手する。

候補はいろいろ。デジタル化したがシャッター音と手触りの感触には変わりがない高級一眼カメラ、部品を揃えるのに一苦労するがオーディオといった愛用機器の類。楽器。それにあちらこちらに散在していたのを全員集合！をかけてあつめた七〇冊ほどの愛読書。手元に置いておきたい本はそれで十分だ。

碁・将棋盤やゴルフ・釣り具セット。手仕事に感じ入っている碗・皿・硯。明かり、時計、置物などのアンティーク（西洋古美術品）。日ごろ忘れがちな彫刻や絵画。造形や色彩が精細な貝や蝶。さらには地球儀、船・飛行機・汽車・車のミニチュア。素朴な木製アフロ・グッズ・けっこうあるものだ。

どれもお気に入り「わたしのモノ」であり「高齢化コア用品」の候補だが、その中から五、七点を選び出して、時に並べ替えをして、暮らしの基点になる「MY・チェア」から動いて出会える範囲に配置すればいいこと。

家庭内に「高齢期のステージ」が立ち上がる。

地球儀なんか意外におもしろい。

極東アジアにある島国ではなく、太平洋リング（大洋弧）の一角にあつて、経済や文化の上で大きな貢献をして輝いている「海洋大国」（排他的経済水域では六位）であることを宇宙飛行士の視点で納得することが



できる。極東（F E）の「小日本（シャオ・リーベン、領土では六一位）」であるとともに、パン・パシフィック（P P）の「海洋大国」であるという多重性を理解することで快い自信を与えてくれる。本当の旅の夢は船旅にある。船中で人びとと出合いながら港町を訪れる。造船大
国化は世紀をかける事業となる。

いまや手にいれるのは困難な貴重種の標本だが、蝶の皇帝「テングアゲハ」なら華麗に舞う姿を思うだけいい。胡蝶に同化して舞った壮年の莊子の「胡蝶の夢」は味わって損はない。

旨し「天の美祿」（酒）をとくとくと注ぐ「しりふくら」（徳利。掌の上でのぬくもりはなまめかしい）でもいい。親ゆずりの高価な骨董品があれば、さりげなく実用にして活かす。高齢期の願望を仮想空間に委ねる「わたしのモノ」の候補はいくらでもある。なければレプリカを置いてホンモノを探し出すこととなる。レプリカの現物化が重要なのは、みんながそれを期待し、生産現場に声がとどけば、「高齢社会」形成への内需の契機となるからだ。

ここで「わたしのモノ」として終生にわたって愛用できるような「高年化用品」を創り出してくれる各地の熟練高年技術者のみなさんにエールを送って先にいくとしよう。

こうしていくつかの「高齢化コア用品」とそれをめぐるいくつもの季節小物、それに奥さまの「わたしのモノ」の応援をえて配することで、存在感が希薄であった時に比べれば、パパとママの存在感を伝えるしかけが見えてくる。

はじめは気づかなかった同居人は、「パパのチェア」や「ママの手編みクロス」や壁飾りや日

用品に示される「家庭内高齢化」の意図に少しづつ関心を強める。同じ機能のモノでも親子に較差（格差ではない）があつていい。モノによる「家庭内の高齢化」はモノを通じた親子語りのはじまりを意味する。外へ出て優れたボランティア活動をしていても、わが家の中に高齢者としての存在感がないようでは、ほんとうに優れた高齢活動家とはいえない。

三 宙に浮いたままの「暮らしの知恵」

「エンプティネスト家族」の孫育て

*近居・隣居より同居が本来型

ここでは六〇歳代の「団塊の世代」よりやや年長の「喜寿期」にあるWさんのお宅の場合を見てみよう。すでに哀樂をともにして暮らした子どもたちが巣立っていき、移り住んだころの幼い姿などを「不在の在」として想い見るほどのスペース「エンプティ・ネスト」（空になった巢）を、そっとしておくことができているご家庭である。

必死で過ごしていたころの記憶をたどりながら、お二人は満足しているのだが、外からはお年寄りご夫婦のわびしい暮らしに見えるらしい。そんな意味合いの声をかけられる。

Wさんの場合も、中年期にぎりぎりまで工面して借り入れをし、都市郊外の一戸建住宅を購

入して転居した。「二世代型住宅」が精いっぱい、「二世帯住宅」にはならない。

子どもがそれぞれに自立した後は、夫婦ふたりで暮らしている。父として母としての立場でそれぞれに内容は異なるが、子育て期のいくつもの困難をクリアしてきた父として母としての感慨のスペースであるとともに、この狭い実家は、子どもたちとくに娘にとってはひそかな生活戦略にかかわるスペースでもある。

このところの傾向として、「三世代同居」は減り続けてきて、高齢者（ここは六〇歳以上）の四〇%までが同居を望んでいるのに、実際に子・孫と同居している人はいまや二〇%台に。

大泉逸郎さんの歌った「孫」が、桑田佳祐の「TSUNAMI」がトップという時代に、場違いといった感じでベストテン入り（二〇〇〇年度の一〇位）したことがあったが、「孫」との同居の減少傾向はなお続いており、願望はやはり歌の背景に遠のきつつある。

「喜寿期」あたりになると高齢者の「マイホーム家族」のありようは、「わが家の三世代同居型」と「ひとり暮らし型」とに分かれる。後者の場合には、夫を失ったあとには女性のひとり暮らしになる（逆もあるが少数）。

孫はかぎりなくかわいい。傷みは目立つものの住み慣れた「二世代住宅」に暮らしている父と母は、子どもが巣立ったスペースを今度は孫のためにしつらえ直して、わが家の三代目を養育する場を用意することになる。

「近居」ができている場合は、離れて暮らしている分だけそれぞれの独立とプライバシーは損

なわれることはないが、離れている分だけ問題回避型の接触とならざるをえない。幼い孫はかわいしいし、暮らしに張り合いをもたらしてくれる。そこで出合いを待ち、会うごとに何かと望みをかなえてやる、やさしいおじいちゃんとおばあちゃんになる。

だれもがきちっとした「孫育て」には限界があるのはわかっている。現状ではこのあたりが高齢者にとっての標準的「しあわせ家族」となっている。「近居」がうまく機能している多くのみなさんのご家族のしあわせを祈りつつ、ここではこのところ減りつづけてきた「三世同居住宅」の課題を見てみたい。三割ほどは残っていないと、この国に伝来の「わが家三代の暮らしの知恵」が途切れてしまうからだ。

いままさにその瀬戸ぎわの時期にある。「三世同居」型住宅は「わが家三代の暮らしの知恵」を子子孫孫に伝えるには、どうしても必要な住環境だからである。

「実家依存症」といわれても

* M字でなく真一文字型の女性就労

娘が結婚して世帯を持ち、子どもが生まれる。

近ごろは「できちゃった婚」が並みの時代だから、結婚後一〇カ月のハネムーン・ベビーを待つよりも、結婚六カ月前後が最多とかで、案外すみやかに確実に「ノンプラン・ベビー（孫）」

がやってくる。

二五歳までの並みの出産期をはずすと、あとは先延ばしして三〇歳代に。これでは少子化に歯止めをかけようがない。それでも三〇歳の大台に乗って、なんとか子どもをと覚悟はきめたものの、夫婦の不安定なしごとでは将来、養育・教育費が家計の重圧になるのは見えている。

公立でも約一〇〇万円、私立だと約二三〇〇万円かかるというし、就学前の時期のたいへんさを聞き、マスコミを賑わす子どもたちにかかわる事件を目の当たりにして、不安はつるばかり。そこで、「ケアさん力を借して」ということになる。

子育てに母親の助力を期待しすぎると、「実家依存症」といわれかねない。

国は夫婦ふたりによる子育てを「エンゼル・プラン」（文部、厚生、労働、建設の四大臣合意により平成六年一二月に策定）以来の目標として推奨してきたし、若いカップルを対象にして子どもの養育のしごとをしている専門職側からは、祖父母の育児参加は歓迎されていない。

驚いたことには「次世代育成」や「子ども・子育て」の現場では、「祖父母」という文言すら文書のどこにも示されていないのである。これではわが家三代の暮らしの知恵は、宙に浮いてしまうのではないか。

「実家依存症」といわれても子育てに母親の助力（家族の含み資産）を期待して両親と同居して暮らすことを考える娘夫婦が少なからずいる。

かつてシュウトメにわずらわされないうよう専業主婦を求めた母世代の「核家族」指向から、

M字型就業を避けて真一文字型の就業により専業課長でありたい娘世代へのUターンである。ここは主に女系の母娘とするが、それでも三割強は十分に確保できる。

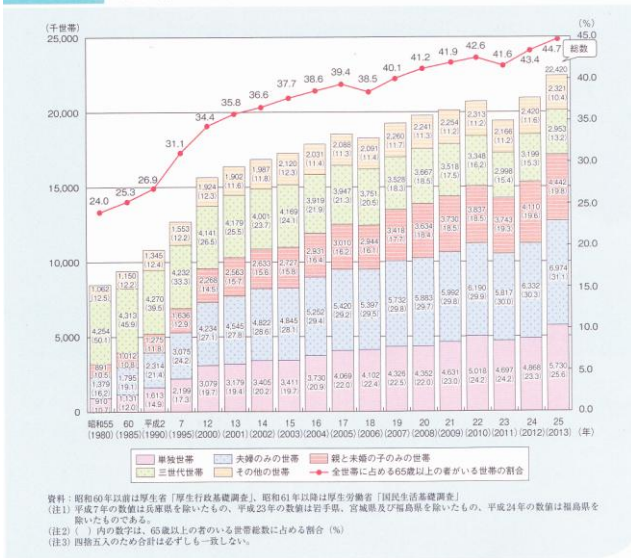
「三世代同居型」住宅の魅力

* 高齢化ではメーカーが配慮くらへ

大都市近郊に住むWさん夫妻は、近居して子育て中の娘家族からの要望もあって、「二世帯三世代同居」型の住居への建て替えを覚悟している。

覚悟というと大きさに聞こえるが、目をつむって、どこに何があるかまでが分かっている住宅から、新たな暮らしへの転換は、やはり覚悟がいるという。地方のお宅なら、敷地内での「隣居」が可能だろうが、都市郊外住宅の場合は残念であるが、そこまでの土地の余裕がない。だから建て替えになる。「三世代住宅」についてメーカーを通じて調べてみると、事例は決して少なくはない。各メーカーとも

図1-2-1 65歳以上の者のいる世帯数及び構成割合（世帯構造別）と全世帯に占める65歳以上の者の割合



ユーザー側のさまざまな要望に対応できるノウハウを持っており、住宅内のバリアフリー化はすみずみまで意識されている。Wさん夫妻にはこれが魅力である。

部屋の配置はもちろん、つまづいて転倒しないよう段差をなくしたり、手すりを設けたり、階段の勾配を緩くしたり、車イス（訪問客もある）を考慮して幅広廊下にしたたり、少ない動作で開閉できる引き戸を多くしたり・などが実現されている。「家族とともに成長する住まい」を提案しているメーカーもある。

すでに建て替えて「三世代同居住宅」に住んでいるお宅を実際に訪問する機会を提供しているメーカーもある。

そこで、Wさんは訪問会に参加してみた。

大手メーカーによる広域造成地での建て替え住居だから外形も安定している。樹木も育っていて、大ぶりに枝を広げたサクラも庭の隅にあって、それを囲むようにしてL字型の二階家が建っている。

「ここを選んだ家内の母が子どもの成長とともに大事にしてきた樹でしてね」

Wさんのうらやましそうな庭への視線を察して、ご主人がいう。

夫妻のほかには高校生の娘と義母の四大家族。一階は母親の部屋と共用のスペース、二階に夫妻と娘の部屋と広いリビング。一角に書斎もあって、サザエさんのオムコさん「マスオさん」型の男性として「三世代同居」を成立させながら、マスオさんよりはずっと存在感があるよう

に見受けられた。

上下階の雰囲気違和を感じさせなかったのは、母と娘の間に暮らし方の一貫性が保たれているからだろう。「三世代同居型住宅」として申し分ないが、それでも義母の方の孤立遠慮がちな気配が構造やモノに表われているのが気になったという。

「長寿社会対応住宅」として「長寿社会対応住宅設計指針」（一九九五年、建設省。この年に「高齢社会対策基本法」が成立した）が出て二〇年になる。住宅産業は、メーカーの配慮くらべて高齢化対応がもっとも進んでいる業界である。住宅メーカーによって取り組み方は異なるが、どこも「二世帯住宅」のノウハウを十分に蓄積している。

そこまでは結構なのだが、せっかくの二世帯同居型住宅にもかかわらず、どのメーカーの小冊子のモデル設計を見ても、まだまだ共用スペースのつくりつけがミドル＋ジュニア主体に寄りがちになっている。「三世代型住宅」とは称しているものの、「離れた和室ひと部屋への高齢世帯の引きこもり」が推測できるものが多くみられるのが実情なのである。

ここにも高齢期が余生であるという風潮が濃く反映されている。これではほんとうの高齢化時代の三世帯住宅とはいえない。

「人生の第三期」の主役として、これから二〇年もの長い高齢期をゆったりと暮らす家ではない、とWさんは気づいている。

暮らしの知恵を次世代に伝える

*「うちのジージがね」と自慢するジユニア

ここは妻であり子の母であり孫たちの祖母となる高齢女性の出番である。

孫の成長に接しながらわが家の「暮らしの知恵」を伝えられる場としての「三世代共有スペース」と「三世代プライベート・スペース」を織り込んだ住居を目標にしてW家は設計にはいつている。娘と共有する台所へと孫と接点をもつ居間への動線に高齢女性の工夫がみられる。

いまは三世代が揃っていないくとも、また自分がいなくなっても、三世代が等しく扱われる同居住宅が「三世代同居型」住宅（長いので「三同同居住宅」）である。

「家族みんなで考えているいろ解決することができずから」

と、Wさんはライフ・スタイルが異なる家族三代が出くわすさまざまな場面での処理にも気をくばる。

「三同同居住宅」をいま実現できるW家は「超」がつく「しあわせ家族」である。すべてのご家庭でできるわけではない恵まれたケースではあるが、多くあつてほしいケースなのである。超優遇措置を講じて地方創生を担う次世代のために「しあわせ家族」の居場所を増やすことだ。強くておだやかな国民性は三世代あるいは四世代同居に培われて継承されていくのだから。

「三同同居住宅」の標準化のために、国や自治体はさまざまな優遇措置をおこない、建設業者

はノウハウを蓄積し、企業側は女性社員の地元勤務型キャリアの設置とともに、子育て期の女性が男子社員と伍して能力を十分に発揮できるよう支援する。

地域と家族は総出で次世代を育てることとなる。

これまで女性社員の六割におよぶ結婚時の「寿退社」とその後のアルバイトというM字型就業にかわって、入社時から高年齢まで真一文字型にしごとに集中できる女性人材として処遇されるようになる。

そして次世代に、母系のつながりを有効に活かしながら「わが家の暮らしの知恵」を伝えることが可能になる。母と娘がやりとりする継続性のある生活感、祖父母と接することによってもたらされる孫世代へのメリットには計り知れないものがある。父と母はともに凛々しくしごとに向かい、祖父母は家族を温かく包容する。

「うちのジージがね」

といって自慢するジュニアが三分の一ほどいないと、この国の先人が残してくれた「暮らしの知恵」が次世代に伝わらなくなってしまう。国の骨格がもろくなってしまうのである。

疎遠だった「じじい」と「ばばあ」は、同居することで親密な「ジージ」と「バーバ」になって、国の骨格を支えるのである。

高齢者をたいせつにするジュニアを育てる機会をもつ家族。これもまた「高齢社会」を構築するために重要な「三つのステージ化」の一環といえるのではないか。